

ポケット軽けりや尻も軽い、それが雷一の人生だ。

その夜はパチスロで派手にスリむしゃくしゃしていた。

「はあ……ツイてねえ」

高架下の暗がりにさしかかり、同時に電車が駆け抜ける。鈍い振動と重低音が鼓膜を揺すり、窓から落ちる明かりが路面を照らす。

この辺は小学校の通学路になっているが、夜ともなれば人けもなく静まり返る。

「ん」

足を止める。

高架下の暗がりに人影が蹲っている。

灰色のブルゾンを着た胡麻塩頭の老人だ。どこにでもいそうな風体だが、水槽が積まれた手押し車の方は珍しい。

「なんでえじろじろと。イマドキの若えもんは、金魚売りも知らんのかい」

「金魚売り……ってアレか、昭和のドラマや時代劇で金魚を売りにくる？」

「見りやわかんذار、オツムが鈍いな」

さんざんな物言いだ。一応客商売だろうにいいのか？

少しむかつ腹を立てたものの、それを上回る好奇心がもたげてくる。

「季節外れじゃねーの、金魚は風物詩だろ」

「コイツらは死にぞこないよ、縁日の売れ残りのその残り」老人が盛大に紫煙を吐く。

水槽で泳ぐ金魚はどれも元気がない。底でまどろむようにじつとしているものも多い。

「時間帯間違えてんぞ、昼ならまだ学校帰りのガキが買ってくれつかもしんねーのに」

あきれた調子でからかえば、ますます慥然とし煙草を嘔み潰す。

「ほっとけ、金魚鑑賞ってなあスレた大人の楽しみだ」

「その心は」

「赤いおべべをひらひらさせて、気持ちよさそーに泳いでんの見ると癒されんだろ」

「説得力あるんだかないんだか」

「一匹どうだい」

「何円？」

老人が指を三本立てる。

「ぼりすぎじゃね？」

「三百円だぞ」

「だからぼりすぎだつて」

「上手く育てりやでつかくなるぞ、鯉みてーに」

「ポロアパートで飼えねーよ」

「洗面台か風呂に水張つて放ちゃいいさ」

「その間どこで体洗えばいいの」

「銭湯行け」

「いまだきレアだつて」

「んじゃ川」

「無難に逮捕だろ」

苦笑いする雷一に「こごとと勢いを得て食い下がる。

「一匹百円、いや五十円にまけてやる」

「自分の面倒見るだけで手一杯」

老人がぎよる目を見開く。

「ただでよこせつて？ もつてけ泥棒！」

「言つてねエし」

どうあつても押し付ける気満々ときた。

強引さに辟易する一方、あんまり必死なもので生来お人好

しな雷一は同情する。

この時間まで屋台を引いてたということは、金魚の売れ行きは芳しくないのだ。

道行く人にかたつばしから声をかけれど空振り続き、歩き疲れて高架下で休んでたなら哀れを誘うし、売れ残りの金魚を積んでとぼとぼ徘徊する姿がツキに見放された自分と重なり、赤の他人だからと突き放せない。

寿司折りならいざ知らず、酔つ払つたサラリーマンが家族

への土産に生の金魚を買つていくとは考えにくい。

雷一は長々と息を吐き、頬杖を付いて呟く。

「金魚にやトラウマがあつてさ」

「踊り食いでもしたか」

「元カノがトイレに流した」

衝撃の事実にも、さすがの老人も閉口する。

「そりやまた……怖エ女だな。うちの女房といい勝負だ」

「別れ話がこじれちまつて……去年の夏祭りに二人でとつて、けつこーでつかくなつてたのに」

思ひ出すだに胸が痛む。

トイレの水に揉まれて流されていく金魚の姿は、雷一の目にしつかり焼き付いて離れない。

「あれから生き物は飼わねエつて決めたの」

元カノが去つた後、空つぼの水槽は粗大ゴミの目に出した。金魚がいらない水槽なんて見ても寂しさが増すだけだ。

「トイレで水葬されたんじゃ浮かばれねーな」

「ダジャレかい」

「確かに浮かんじゃ来ねーけどさ」

鼻白む雷一と向き合い、老人がにっかり破顔。

「お前さん、イイ奴だな」

特別に教えてやる。

老人があたりを憚る小声で手招き、雷一は注意深く乗り出

す。

「コイツはな、夢を叶える金魚なのさ」

老人が耳打ちする。

「ゾウのパクリ？」

応とも否とも言わず、意味深に微笑んで離れていく老人を見返す。

「騙されたと思つてもらつていきな。悪いようにはしねえから」

「だからもーこりごり」

「いいからいいから」

てんで人の話を聞いちゃいない。

老人はいそいそと腰を上げ、ポイで水槽からすくった金魚をビニール袋に移し、有無を言わず雷一に手渡す。

「夢を叶える金魚ねえ……眉唾だな」

代金はいらねえよ。

その申し出に心が動いたわけでもないが、老人に押し切られて金魚を受け取る。ここで断ればその他大勢と一緒に処分される運命、だったら素直に譲り受けた方が数日延命できる。

水洗トイレに流れていった金魚の末路が臉の裏に浮かび、雷一はビニール袋の中を覗きこむ。

いかにも小さく弱々しい。緑日の売れ残りの残りというの

がしつくりきた。

「金魚つて何食うんだっけ」

同棲時代は元カノが買つてきた粉末状の餌をやっていた。どこで売ってるかは知らない。コンビニにあるのか？

「コイツの餌は特別なんだ」

「特別つて」

老人が口を動かすと同時、高架の上を電車が通り過ぎた。断続的な振動がトンネルを伝い、四角く区切られた明かりが視界を染める。

「おっと」

水が揺れないように袋を持ち直し、再び目を上げると老人はいなくなっていた。